

日本キリスト教団藤沢教会 2021年4月18日

列王記上 17:17~24、マタイによる福音書 12:38~42

雨上がりの朝ほど清々しいものはありません。心が洗い清められたように思えるからです。特に、イエス様の復活を共に祝ったばかりの私たちにとりましては余計にそうです。それは、復活の主が共にいることを深く実感させられるからでもあります。けれども、この朝がもし雨だったらどうでしょう。しとしと、ぱらぱら、しよぼしよぼと、その程度であればまだしも、昨夜のように、ぱらぱら、ざあざあ、ばしゃばしゃと、雨脚が激しかったらどうでしょう。どのような気持ちでこの朝を迎え、また、どんな気持ちで礼拝に足を運んだのでしょうか。気持ちの振れ幅は一人ひとり同じではありませんが、恐らくは、今日とまったく同じに、ということではないように思います。それは、私たちがその日その日、その瞬間瞬間にあったことの影響を受け、気持ちを左右させるものだからです。ですから、そういう意味で、私たちに忘れてはならない大切なこととあります。なぜなら、いつまでも忘れられずにいると先へ進むことができないからです。それゆえ、忘れることは神様が私たちに与えてくださる恵みの一つと言えるのでしよう。ただ、困ったことに私たちはその時忘れてはならないものまでも一緒に忘れてしまうものなのです。

そこで、考えたいのは、私たちが絶対に忘れてはならないものが何かということとです。ぱっと思いつくところと言いますと、それは、神様とイエス様のことですが、ただし、聖書が私たちにそれを強く求めるのは、私たちの側の事情を見てのことではありません。私たちと、神様とイエス様との関係性は言葉の上だけのことではなく、私たちの心と体に刻みつけられたものであり、つまりは、身体的なものとして私たちの身に備わっているものだからです。だから、御言葉は、覚えよ、と繰り返し語るのですが、そこで、この覚えよというところで、皆さんに一番馴染み深い箇所はどこでしょうか。恐らくは、コヘレトの言葉、口語訳聖書で言うところの伝道書12章1節の「青春の日にこそ、お前の創造主に心を留めよ、あなたの若い日に、あなたの造り主を

覚えよ」とこの御言葉であるろうと思いません。ただ、この覚えよ、心に留めよ、忘れるなということが様々なところで行われているのは、この身に備わっているというところがなかなか分かりにくいものでもあるからです。そのため、私たちは、信仰をバッジやワッペンのように付けた剥がしたりすることができたらどんなにいいだろうかなどと思ったりもするのですが、私たちがそう思う理由は、神様の言葉に忠実に生きようとする私たちがクリスチャンが、世の中では非常に目立つ存在で、それゆえ、時に息苦しさを感じてしまうからです。そのため、目立ちたくないと思う人ほど、付けた剥がしたりできればと思ったりもするのですが、けれども、私たちの信仰というものは、先ほども申しましたように、身に備わっているところから始まったものであり、ですから、そういう意味で、貼ったり剥がしたりできる便利なものではありません。

ところで、私たちがクリスチャンと呼ばれているのはどうしてなのでしょう。それは、私たちが洗礼を受け、神様のものとされたからです。そして、それは、ただ神様のものとされたというだけではなく、私たちがキリストの命を新たに歩み始めたからであり、つまりは、イエス様の命を受け継ぎ、新たに生み出されたのが私たちクリスチャンであるということとです。だから、洗礼は私たちの生涯においてただ一度の出来事であり、それゆえ、この聖霊によって私たちに刻みつけられた恵みを手放すことはできません。パウロが「私は、イエスの焼き印を身に受けているのです」と自分自身についてこう語っているのは、まさに、キリストのしるしを押される出来事が一回限りのものであり、かつ、絶対に消すことのできないものでもあることを言いたいからとです。

けれども、この焼き印という言い方が良くないのでしょうか。キリストのしるしを押されるというこの言い方はあまり評判が良くないようです。ただ、それ分らないことではありません。なぜなら、パウロが言っている焼き印とは、牛や羊





